

巻ノ一 信奈のサルになれ!

相良良晴、高校二年生は慌てていた。
気がつくど、なぜか戦国時代の合戦場のど真ん中に立っていた。

「あれ？ 待てよ。なんでだよ？ ここはどこだよ？」

川沿いの草原に轟く馬蹄の音。
鳴り響く、種子島の轟音。
長槍を構えて互いに押し合う、足軽たちの雄叫び。

「戦国の軍団同士が会戦中じゃねえか!? ゆ、夢なのか? いや夢にしては生々しすぎる、リアルすぎる!! ここは関ヶ原か? それとも三万ヶ原か? 待てよ。両軍の旗指物は……家紋は」

しかし、今の良晴にそんな余裕はなかった。見慣れない学生服姿の良晴を、両軍の足軽たちが「なんだぎゃ、あの格好は?」「南蛮人か?」「にしては猿顔だみやあ」「新手の敵だみやあ」と誤解して左右から同時に襲いかかってきたからだ。

「ちよ。待ってくれ! 俺は兵士じゃないからっ! 通りがかりの迷子の学生だよっ!」

「みやああああ!」

「だぎゃああああ!」

「尾張弁!? それとも三河弁?」

相良良晴。平和と帰宅部をこよなく愛するごく普通の平凡な少年。

趣味はすでにおわかりのように戦国ゲーム。とりわけ戦国SLGの草分け的存在にして決定版である『織田信長公の野望』の大ファンだ。

特技はなぜかドッジボール。クラスでは通称「球避けのヨシ」。ボールを投げて攻撃するのは苦手だが、敵が投げてくるボールをかわず天性の坎の持ち主だった。生まれつき運動神経が「回避」に特化しているらしい。ただし攻撃力は皆無なので、ドッジボール部に誘われたことはない。

しかし、その良晴でもさすがに五本、十本と次々と繰り出されてくる槍のすべてを避けることはできず、一本の槍の穂先が肩にかすった。

経験したことのない激痛が全身に走り、そして、血がほとばしった。

「……ぎゃあああ? いったええええええ!! ゆゆゆ夢じゃねええええ! これは現実だ! もしも夢だとしても、刺されたら間違いないその痛みで死ぬる!」

なぜなんだ? 意味がわからない。俺はいつも通り学校に登校して、今はその帰り道の途中だったはずだが——? あー早く『織田信長公の野望』の続きをプレイしてえ! 今回のバージョンアップで、上杉謙信を女性にできる上に、各大名家の姫たちを武将として登録できる『姫武将』機能が追加実装されるらしい! 老舗『織田信長公の野望』も昨今の姫武将ブームのビッグウェーブに乗ったのか! とウッキウキだったはずなのに?

もしかして、下校途中からの記憶が飛んでいるのだろうか?

なにがどうなっているのかわけがわからないがここはどうやら現実の世界だという確信を抱いた良晴は(あの長槍で田楽刺しにされたら即死だ)と青ざめながら、追ってくる足軽たちに背を向けて、必死で駆けた。

この会戦は、河川敷で展開していた。良晴はだから、川を目指して、けんめいに走った。霧が邪魔で川向こうが見えないが、とにかく川を越えればきっと安全地帯に辿り着けるはずだ!

「戦慣れしているおらたちが追いつけないぎゃあ。意外に逃げ足が速いみやあ!」

「あの、妙な南蛮風の草履の力かもしれんみやあ!」

「軽装だからだぎゃあ!」

良晴は息を荒らげて全力で駆けながら泣いた。

いやいやいや！ おっさんたちこそ、そんな重量級の鎧とか武器とかを装備しているくせに、異常に足が速すぎ！ しかも呼吸も乱さねえし全員スタミナの化け物だ！ 戦国時代の足軽と現代の帰宅部高校生とは、基礎体力が違いすぎるう！

「まずい！ 川を渡られてしまうぎゃー！」

「うみやあ。あれは敵方の忍びだみやあ」

「言われてみれば黒装束！ こうなれば……弓矢、放てーい！」

「えつ、弓矢？ 待ってくれえええ！」

問答無用。

背後から、次々と矢がいかけられてきた。

頬のすぐ脇をかすめた矢が、無音で足下の大地に深々と突き刺さるさまを良晴は見た。

「うっ、うわあああああ!？」

避けた。

あたかも背中に目がついているかのように、必死で矢をかわした。ぎりぎりのところかわし続けた。

持ち前のカンだけが頼りだった。ボールが飛んでくる時と同じで、槍も矢も、良晴の身体に向かってくる際に周囲の「空気」を巻き込む。その空気の微妙な動きを、良晴の力

ンは皮膚感覚で感知するらしい。

平和な学校生活ではなんの役にも立たなかった微妙な特技だが、まさかこんな不条理な死地に追い込まれた際に生きるとは、良晴は今まで考えたこともなかった。

「すげえ！ ほんものの猿だぎゃー！」

「一本も当たらないみやー！」

ところが俺は「場の空気」ってやつは読めないんで教室ではいつも余計な言葉を口走って女の子にはもてないんだよなあ、と良晴は泣きたくなった。

ともかく逃げされた。良晴は霧の帳の奥へと突入した——追い詰められると、意外にも身体が動いた。(人間、死んだ気になれば体力が湧いてくるんだなあ)とわれながら不思議だった。下半身を川の流れに浸しながら、「わけのわからないままに死にたくねえ」の一心で喘いで川を渡りきり、大地を再び踏みしめて「助かった……！」と安堵したその時だった。

霧が晴れて、視界が開けた。

そこは安全地帯などではなく、一軍を率いる総大将の本陣だった。

帳の下、南蛮椅子に優雅に腰掛けている総大将と、良晴は目を合わせてしまっていた。

「な、なんだってえええええ!？」

その旗印は——丸の中に、二本線。

「忘れもしない。これは海道一の弓取り、駿河の大大名・今川義元の家紋だ！ ってことは……ここは今川義元の本陣!? いや、でも、違う！ だって間違ってる！」

「あら。わらわを知っていますの？ なんですよ、お前は？ 奇妙な黒装束を着ていますわね？」

そう。

今川義元が座っているべき南蛮椅子の上には、麗しい貴族然とした少女が腰掛けていた。気が強そうな大きな瞳に長いまつげ、整った顔立ち、白い肌。

戦場だというのに、重そうな十二単を着ていた。

しかし、少女が平安貴族ではなくれつきとした武士だとわかるのは、彼女が頭に龍の前立てをあしらった兜を被っていたからだ。

貴族の姫は、絶対に、黄金に輝く龍の兜なんかを被ったりはしない。

「き、き、きみが、今川義元？ たしかに今川義元は、昨今ではお齒黒の肥満した麻呂というキャラを脱してイケメン化が激しかったけれど、しかし、姫武将化というのは……」
 「まあまあ。意味のわからない言葉ばかりですわね。お前、どこの田舎者ですよ？ もつとわらわに通じる言葉で話さない。それとも、わらわが美しすぎて混乱しているのですかしら？ 無理ありませんわ。わらわは由緒正しき足利の分家という高貴な血筋の生まれにして、近い将来、上洛して天下を盗るほどの英傑ですよ！ おほほほ！」

俺は『織田信長公の野望』のやりすぎで、今川義元が姫武将化された世界の夢を見ているのか？ いや違う！ あの槍に受けた痛み、飛んでくる矢の質感と速度と殺傷力！ などよりも俺のカンが教えてくれる。このリアルな「空気感」は——信じたいが、やはりここは現実の世界なんだ！

ともあれこのままでは「くせ者」として始末されてしまう。この高校の制服が、どうやら忍びの黒装束の一種に見えるようだ！

良晴はこの時、われながら不思議なほどにある意味落ち着いていて、錯乱しなかった。この窮地を脱するためには、この一手しかない。

義元の足下にひれ伏して、叫んでいた。

「今川義元！ 俺は忍びじゃない！ 足軽として、今川家に仕官させてくれ！」

「イヤですわ！」

「ヒエツ。即答ッ!？」

「なぜお前のようなあやしげな格好の男を、この由緒正しい今川家の姫大名であるわら・わが雇ってあげなければならぬのです？」

「姫大名ッ!？」

「元康さ〜ん。やっておしまいなさい！」

「承知いたしました〜」

陣幕をかきわけながら、小柄な眼鏡つ子の姫武将が駆けつけてきて、腰の日本刀を笑顔で抜刀していた。頭にはなぜか、たぬきのようなつけ耳をつけている。眼鏡。たぬ耳。そして髪の色は緑がかっていた。力ない笑顔が愛らしいが、どことなく辛薄そうだった。

「今川義元さまの一家臣。松平元康、見参いたします〜」

このため娘が、松平元康？

ということは、のちの徳川家康？

戦国乱世の八割方を平定してあと一步で天下統一を成し遂げるところだった天下人・織田信長の同盟者。その信長亡きあと、天下人の地位を継いだ豊臣秀吉のもとでもナンバー2を務め、そして秀吉が死ぬや否や手のひらを返して豊臣家を攻め滅ぼし最終的に天下盗りレースの勝者となった大御所。かの徳川幕府を開設した大狸。

(そうか。松平元康は若い頃、今川義元の使い走りだったんだ)

小さくてなかなかかわいいなあと元康に見とれている暇はなかった。

「義元さまのご命令で、上意討ちにさせていただきますね〜」

元康はにこやかな笑顔のまま、良晴の首筋に、刀を振り下ろしてきた。

「おわつ、あぶねえ！ 油断した！ 待ってくれええええ！」

さすが、女の子になっても松平元康は腹黒い！ 良晴は慌てて腰を捻り、そのまま本陣から勢いよく飛びだしていた——その勢いで河川敷から転がり落ちて、川の中へと逆戻り

した。

「あれ〜？ 義元さま、かわされちゃいました〜？」

「間抜け面でしたが、すさまじい身のこなしでしたわね元康さん。織田方が放った乱波に違いありませんわね」

「はい〜。必ずや討ち果たして参ります〜！」

陣幕をかきあげ、勢いよく河川敷を駆け下りてきた。陣幕で殺伐とした会話が交わされ、そして、笑顔の松平元康が刀を振りかざしながら陣

グメだ。今川義元に仕えるのは無理だ！ 山本勘助が仕官を願い出た際に、顔がブサイクで怖いという理由で断ったという噂はほんとうだったのか？

ともあれ、良晴は川を元来た方に渡ってこの場から逃れねばならなかった。

「あわわ。待ってください〜い。私が義元さまに叱られます〜」

日本刀をぶんぶん振り回しながら愛らしい声で叫んでいる松平元康。振り切らねば。

しかし意外に元康は足が速く、川を渡りきったところで追いつかれそうになった。

「上意討ちです〜」

「ちくしょー、こんなバッドエンドはイヤだっ！ 何か武器はないか、武器は……」

良晴は、松平元康と戦う覚悟を決めた。

かわいい女の子を相手に戦うのは不本意だが——
このままばつさりやられるくらいなら、戦って討ち死にしてやろう！

もしもこれが夢ではなく現実だとしてもだ！

傍らに倒れている足軽の手から槍を奪おうとした。

だが、すでにその足軽がことごときれているためだろう。指が固まっていて、槍が外れない。

「えいやー！ 隙だらけですー！」

「し、しまった！」

「坊主、あぶないみやあー！」
かばわれた。

今川方の小柄な足軽が走ってきて、良晴の体を小脇に抱えると、そのまま走り出した。
危ないところを助けられたらしい。

「待つですー」

朗らかな笑顔で元康が追ってくるが、足軽は待たなかった。

今度こそ、兵士が伏していない安全な林の中に運んでもらった。

小柄な足軽は「ふいー」と息を吐きながら良晴を下ろすと、自分は大木の幹に背をつけて座り込んだ。

良晴は頭を下げて、礼を言った。

「あ、ありがとう。なんで俺を助けてくれたんだ？」

「坊主、お前は織田方の忍びだみや？ あの子のこなしはただ者ではないみや」

「えっ？」

「わしは今川の姫さまに仕えておったが、あのお方はブサイクな男が苦手みたいでみやあ。出世できそうになかったぎゃ」

確かに、足軽はまだ若いのにまるでサルのようなしわくちや顔だった。

「それでこの戦のどさくさに、織田方へ寝返ろうと考えておった。なあ坊主、わしを織田の殿さまに紹介してくれんか？」

これは、織田信長と今川義元の合戦だったのか……と良晴はつぶやいた。

「どうじゃ？」

「助けてくれたのに申し訳ないけど、俺は織田の忍びじゃないんだ」

「違うのきや？」

「俺は相良良晴。ただの高校生だよ」

「孝行せえ？ わしも、早く出世しておつかあに孝行してえみやあ」

「いやいや、ええと……そうそう！ 俺は、武士じゃないんだ！」

「わしとて農民のせがれよ。じゃが、今は乱世じゃ。合戦で手柄を立てれば出世できるに

やあも。わしの夢は一国一城の主になることじゃ」

「一国一城の主……」

「おうよ。男としてこの世に生を享け、一国一城を望まぬ生き方などわたしにはできんみやあ！ だってお城の主となれば、女の子にモテモテのみやあ！」

良晴は思わず、このサル面の足軽の手を握って、その通りだ！ と叫んでいた。

平和な現代日本ならいざしらず、戦国時代に來てしまった（？）以上は、国盗り！ 城持ち！ そして、城下町からかわいい女の子を集めてモテモテだ！

それこそが男の甲斐性！

野性と野望を忘れた現代人よ、聞いたかつ？

「おっさん、気が合うな！」

「わしもそう思うみやあ！ お主、わしに匹敵する女好きだにや？」

「ああ！ リアル彼女はいるが、脳内だけはいつもハーレムだぜ！」

「りある？ はあれむ？ なんじゃそれは？」

「あんた、いい人そうだし、俺の命を救ってくれたしな！ 俺あ、おっさんの夢に賭ける！ 一緒に織田方に行ってみようぜ！」

「おお、ありがたいにや坊主！ ならば、わしの弟分になれみやあ！」

「なる、なる！ しかしあんたが大名になった暁には——かわいい女の子は俺たち二人で

半分こだぜ！」

「約束するみやあも」

二人のスケベ男は、手を取り合って立ち上がると、西へ抜ける街道へと向かった。

戦国ゲームで鍛えた知識によって、良晴の頭の中にはだいたいの戦国日本地図が描かれている。

ここはおそらく、尾張と三河の国境。三河の大名・松平元康は史実通り今川義元の家臣になつていようだから、東の三河へ向かえば今川領、西の尾張へ行けば織田領なのだ。

織田軍に就職できるアテはないが、なんとなくうまくいきそうな気がしていた。

今川義元は名家の家柄を誇る大名だが、織田信長は身分にこだわらず有能な家臣であれば足軽だろうが農民だろうが抜擢してくれる先進的な大名のはずだ。

だが、林を抜けて街道へ出た瞬間だった。

「ふぐっ？」

小柄な足軽が、いきなり胸を押さえてうずくまった。

「どうした、足軽のおっさん？」

「……流れ弾に当たったみやあ……運がなかったみやあ」

「な、なんだつてっ？」

たちまち、鎧の胸当てが紅い血に染まっていた。

マジかよ？ 人間って、こんなにあっけなく死ぬのかよ？

良晴の顔色がみるみる青くなっている。

震えながら道の脇、地蔵の隣に足軽を寝かせた。

「……坊主。わしはこれまでだみや。お主だけでも行けい」

「おっさんを置いていけねーよ！」

「野望に憑かれた者はいつ死ぬかわからぬ。これが戦国の世の常よ……わしの相方をお主にくれてやる、一国一城モテモテの夢をお主が果たしてくれい」

「おっさん……！」

「……わしや、おっさんと呼ばれるほど年とってないみやあ……」

すでに心の臓が止まろうとしていた。

足軽の脇がゆっくりと閉じていく。

「そ、そうだ。おっさんの名は？ 俺が出世したら、おっさんのでっかい墓を建ててやるからさー！」

「……わしの名は……木下……藤吉郎……」

「えつ？ ええええええええええつ？」

「……さらばじゃ、坊主。生きろよ、モテモテなる野望のために」

ちよ。待て。待ってくれ。木下藤吉郎って——豊臣秀吉じゃねーか！！！！

織田信長に仕え、農民の子から天下人にまで上り詰める男。

日本史上最大の出世を果たした、英雄の中の英雄じゃないか！

言われてみれば、小柄でサル顔で——この人なつつこさといい、秀吉その人に間違いないかった。

「おっさん、死ぬな！ あんたが死んだら、日本の歴史はめちゃくちゃになっちゃう！」

あんたが織田信長に仕えなければ、この先——

「……信長とは誰じゃ？……織田家の当主の名は……のぶ……な……」

ことされた。

良晴の腕の中で、木下藤吉郎、後に戦国大名・羽柴秀吉となり、ついには天下人・豊臣秀吉となって豊臣政権を築きあげる一代の英雄が、足軽のまままでひっそりと死んでいった。

藤吉郎の亡骸を再び地蔵の隣に横たえながら、良晴はぶるぶると震えた。

こんな、俺がゲームで習った歴史と違う。

「ど……どういことだよ？ 何が起きてるんだよっ？」

やっぱり夢なのか？

頬をつねった。痛い！

槍で受けたらしい傷痕がまた裂けて、血がしたり落ちてきた。

「そうか。木下氏が死んだか……南無阿弥陀仏、でござる」

背後で、幼い少女の声が響いた。

思わず振り返ると、鎖帷子と忍者服で全身真っ黒の忍びが腕を組んで立っていた。忍びの少女は子猫のように華奢で小柄で、しゃべり方も舌足らずだった。

現代だったら小学校五年生くらいかな、と良晴は思った。

口元はマスクで覆われていたが、目だけは露出していた。

瞳はぞっとするほど赤く、まつげが驚くほど長い。

「拙者の名は、蜂須賀五右衛門でございます。これより木下氏にかわり、ご主君におちゆかえするといたちゆ」

口調は忍びらしかったが、最後はかみかみだった。

「や、失敬。拙者、長台詞が苦手ゆえ」

「藤吉郎さんの友達か？」

「相方にござる。足軽の木下氏が幹となり、忍びの拙者はその陰に控える宿り木となつて力を合わちえ、ともに出世をはたちよう、そういう約束でござった」

「三十文字ぐらいが限界なんだな」

マスクの下で、子供忍者・五右衛門の顔がぼつと赤くなった。

「う、うるさい。ご主君、名をなんと申す？」

「相良良晴」



「では拙者、ただいまより郎党、川並衆、を率いて相良氏にお仕えいたす」

「いいけど、俺は一文無しで帰る家もない。俸禄は出せないぜ」

「織田家に仕官すればよいでござるよ。あそこは俸禄の支払いがいい」

「うーん。藤吉郎のおっさんなら仕官できるだろうけど、俺はこっちの世界じゃあ完全に身元不詳なんだよな」

ふふふ、と五右衛門が忍者マスクの下で忍び笑いを漏らした。

「相良氏、髪の毛を一本いたただく」
ぶつつ。

五右衛門は、良晴の頭から髪を一本引き抜くと、胸元から取り出してきた藁人形の中にその髪を詰め込みはじめた。

「な、なんだい、それは？俺を呪うのか？」

「我が宿主になっていただく契約でござる」

「奇妙な契約だなあ、ハンコをつかせればいいのに」

「相良氏には、わが幹としてぜひとも出世していただく。それがきのちた氏とのやくちよくであろう？」

「ああ、それがおっさんとの約束だ——わかった、織田家に仕官してみせる！」
実際、藤吉郎の読みは鋭かった。

歴史上では、尾張の小大名にすぎなかった織田家がこの後、天下を盗るはずなのだ。だが、藤吉郎という未来の英雄を欠いた織田家のこれからの運命がどうなるかは、良晴にもわからない。

歴史は、変わってしまったのだ。

それでも、国持ち大名に出世して女の子にモテるといふ崇高(?)な志半ばで散った藤吉郎の代わりに、この俺が戦国ゲームでつちかった(微妙な)知識を駆使してやれるところまでやってやるう、と決意した。

それに、生きてさえいれれば元の世界に帰る方法がわかるかも知れない。

「相良氏、合戦はまだ続いている。織田家の旗竿を持って槍働きをするがよい」

「ああ。槍なんて使ったことねーけどな、やってみつか！」

「ふふん。木下氏が見込んだだけのことはある。若いのになかなかの御仁だ」

「ただのバカかもしれねーぞ？」

「ふふ。同じことよ」

五右衛門は九字を切り、小柄な体の周囲に木の葉を舞いあがらせると同時にいずこかへと消えていた。

やっぱゲーム？

いや、藤吉郎のおっさんの屍はあまりにもリアルだ。

これは、れっきとした現実。戦に敗れば、死が訪れる。

だつたら……「気がついたら戦国時代にタイムスリップしていたあ」と悲鳴をあげたりビクビク怯えている場合じゃない。

「おっさん。あんたの夢、俺が継いだ！ これは引合戦だぜ、うおおおおお！」
良晴は藤吉郎の鎧と武具を貰い受けると、アドレナリンを全開にして槍をかまえ、濃尾平野で練り広げられている戦の場へと舞い戻っていった。

戦場では、一進一退の攻防が練り広げられていた。

織田軍の旗竿を背中に立てた良晴は、今川軍の足軽隊の中へと突撃すると、生まれて初めて握った長槍を振り回した。

だが、いくら藤吉郎を殺した敵とはいえ、憎しみのない相手を殺すことはできなかった。ゲームの画面とはぜんぜんリアルさが違っていた。足軽の兵たちの顔が、そのままつげや口元のしわまではっきりと見える。

こいつらマジで生きている人間だ！ と良晴は叫びたくなった。

(間違いない。俺はほんとうに戦国時代に来てしまったらしい。でも、どうして——)
ええい、ままよ！

そんなことは、生き延びてから考える！

「うらあああああああああ！」

滅多やたらに槍をぐるぐる回して、敵が近づいてこないようにするのが精一杯だった。敵の足軽たちもそれなりに甲冑で武装していて、槍の心得がない良晴には討ち取ることはできそうもない。

敵が練り出してくる槍や刀は、「球よけのヨシ」ならではのテクニクをいかしてひらりひらりと逃げて逃げられた。

それでも次第に息が上がつてきて、あちこちに小さな傷を負った。

もしもこの特技がなければ、あつという間に良晴は屍になっていただろう。

小一時間、草原での押し合いは続いた。

良晴は我が身を守るのが精一杯で一人の敵を討ち果たすこともできなかったし、敵を殺すつもりもなかったが、戦況は織田軍有利になっていた。

「はあはあ……！」

「皆の者！ 勇気を奮い起こせ、あと一押しだ！」

軍馬に乗った鎧武者が、前線に押し出てきて叫び声をあげはじめた。

一気に敵前線を崩す好機とみた、騎馬隊の突撃である。

「足軽ども！ 誰か本陣へ戻り、ご主君をお守りせよ！」

だが足軽たちは、敵の首を一つでも取ることに夢中で誰も本陣へ引き返さない。俺は敵の首をあげるなんてイヤだし、織田軍の負けはなくなったようだし——良晴はひらめいた。

（本陣へ向かおう！）

自分の足で走りながら、良晴はちらりと騎馬隊を指揮する馬上の武者を仰ぎ見た。立派な鎧兜よろいかぶとに身を包んでいたが、またしても女の子だった。

（今川義元も松平元康も、そしてこの織田家の武将も女の子だ。この世界はいろいろなってるんだ？）

考えている暇はもちろんなく、槍を構えて織田軍の本陣へとはせ参じる。

よほどの乱戦だったのだろう、すでに大将を守る近衛兵たちも前線へ出てしまっており、本陣はがら空きだった。

ところが、である。

そこに、いずこからともなく急襲してきた今川方の決死隊が切り込みをかけていた。

織田信長、絶体絶命の危機！

（うおおおおお？ 藤吉郎のおっさんに続いて織田信長まで死んじまったら、日本の歴史はもう修正不可能だ！）

秀吉は最終的には天下を盗るのだが、それは主君の織田信長が戦国の世をほぼ統一して

くれたから。この二人が共に倒れば、秀吉の天下を後から奪った徳川家康（松平元康）も日本を統一できないだろう。家康は、この二人に仕えつつ、主君が死ぬのをじつと待ち続けた結果、最後に天下人の座が転がり込んできたようなものだからだ。

誰も乱世を統一できない。もしそーなると日本がどーなるのかはさっぱりわからないが、戦国ゲーム好きとして、それはイヤだった。

それに何よりも、本物の戦国時代の熱い息吹が、良晴の血をたぎらせていた。

織田信長とおぼしき大将が今川決死隊に四方八方から取り囲まれているところへ、良晴はやややへつぱり腰ながらも果敢に突進していた。

大将の兜かぶとへと飛んできた槍を、自分の槍で叩き落とした。

（間一髪、信長の命を守ることができた！ この俺がっ？ その時、歴史が動いた！）

じーんと感動したものの、未だに敵に囲まれたまま。大将・信長と顔を合わせている暇はない。大将を守るために壁かべとなつて立ちはだかる。

「織田家に仕官するため、素浪人・相良良晴、ここに見参！」

「新手の織田兵だ！」

「たった一人だぞ！ 先にやってしまえ！」

大将を倒すためには壁となつた良晴を除かねばならない。

今川兵たちがいつせいに良晴へと襲いかかってくる。

「おらおらおらおらおら！」

良晴は焦った。本陣は狭い上に、敵の数が多すぎる。

やばい！ いくら俺でもこれ以上接近されたら、刃を避けきれなくなる。

「近寄ったら命はねえぞおおお！ うおりゃあああああああ！」

良晴は大声で叫びながら、ぶんぶんぶんぶん、とでたらめに槍を回転させた。

だが――

「こいつ、素人だぞ！」

「四方から囲んでいつせいに槍で突こう！」

「しまった、バレたか！」

そりゃあ、バレる。

その時、ほむ、ほむ、と破裂音を立てながら、足下から煙幕が広がった。

視界が白い煙に覆われている中で、

「ぐおっ」

「うわっ」

「ふぎゃっ」

と、今川兵たちの口から悲鳴が漏れはじめる。

そして、煙が風に流されて良晴の視界が開けると――

本陣を襲っていた今川の兵士たちは全員、良晴の足下に失神して突っ伏していた。

（そうか。五右衛門がやったんだな）

戦場では、相手を殺すよりも失神させるほうが難しいと聞く。

よほど腕に差がなければ、手心を加える余裕などないからだ。

（つてことはあの子供忍者、舌足らずのちびっ子のくせに実はすごく強いのか？）

良晴がぼかんと口を開けていると、背後から馬が駆けてくる蹄の音が響いてきた。

「ご主君、今川軍は退却をはじめました！ ご無事でしたか！」

さつき騎馬隊を率いて前線で突撃していた、勇ましい女の子の武将だった。

良晴と同じ年くらい。意志の強そうな眉と瞳がけっこう綺麗かも、と良晴は思った。

（うん？）

鎧の胸の部分が妙に大きく膨らんでいるのが見えた。

（さよ、巨乳……？？？？）

思わず胸元を見つめてしまうと、馬上の女の子の武将がそのエロ視線に気づいたらしく

「きゃあっ。」と悲鳴をあげていた。

「な、なんだ貴様はっ？ あ、あ、足軽の分際で、あたしの胸をじろじろと!？」

「あっ、ごめん！ こんな巨乳の女の子、リアルでは生まれて初めて見たのでつい……」

かああああつ。

男勝りの女の子武将が、怒りに震えながら真つ赤になって刀を抜いた。勝ち気そうな目じりに、うるうるると恥辱の涙が浮かんでいる。

「ぶ、無礼者！ 手討ちにしてやるっ！」

「ひい！ 悪かった！」

良晴が思わず倒れ込んで逃げだそうとした、その時だった。

ずっと本陣の椅子に無言で座っていた大将が、口を開いた。

「やめなさい、六！ そいつは一応わたしの命を救ったんだから、褒美をあげなきゃ」

「なんと、それはまことですか？」

「ええ。槍で刺されそうになったところを助けてもらったわ。それに、わたしにもよく見えなかったけど、そいつ妙な術を使って今川勢をまとめて倒したわ」

「……そ、そうでしたか。ぎよ、御意」

そうだった。この本陣には、織田家の大将がいたんだった。

危なかったが、守り抜けた。

織田信長。

戦国乱世を無慈悲な鬼の戦で強引に統一しようとした、魔王とも霸王とも呼ばれる男

いくらなんでも、信長まで女の子になってるわけは——。

「信長さま、ぜひこの俺を足軽として雇ってくれ！」

ガンツ！

顔をあげると同時に、顔面めがけてわらじばきの足の裏が飛んできた。

「ふぎやっ？」

「はあ？ 誰よ、信長って？ わたしの名前は、織田信奈よ。の・ぶ・な」

「ええええっ？」

「何よ何なのよあんたは？ これから自分で仕えようとしている大将の名前を間違えるなんて、あんたほんとにバカじゃないの？」

良晴は顔を踏まれながら、この毒舌の大将の姿を見上げていた。

茶色がかった髪は、でたらめな茶筌に結っていた。

甲冑などは、着ていない。

頬とおでこは煤で真っ黒。湯帷子を片袖脱ぎにし、腰に巻いたわら縄に、太刀と脇差を差し、火打ち袋とひょうたんをぶら下げ、そして腰と足を覆う袴の上には虎の皮を腰巻きのように巻いていた。

左の肩には、飼い馴らした鷹。やたらに獯猛そうだった。

そして右の肩には、南蛮渡来の種子島——黒々とした鉄砲を担いでいた。

不良というか、かぶき者というか、独創的な衣装というか。

これこそまぎれもない「尾張のうつけ者」織田信長の若き日のファッションだ——と良晴は思った。

だが、しかし。

「なにをばけけ見つけてんのよ？ わたしは、織田信奈！ 尾張の戦国大名、織田家の当主よ！」

良晴は今川義元、松平元康に続いてまたしても間違いを見つけた。

今度は、ふたつ。

ひとつ。名前がちよつと違う。

ふたつ。ひどく短気そうだがままそうだが——この高い声、この細い腰、やわらかそうにふくらんだ胸元——またしても、女の子だった。

こんなスーパースター歌舞伎みたいなヘンな格好さえしていなければ、もしかしたらそれなりにかわいいかもしれない、でもこんなに汚い格好されると元の顔がわからん、と良晴は思った。

ただ、らんらんと生命力に溢れて輝いているふたつの瞳だけは、美しいかもしれない。ちよつとだけ。

「ほら。あんたの名前は？」

ぐにっ。

口の中に、種子島の銃口を突っ込まれていた。

答えないとこいつ本気で撃つ！ と気づいた。

しかし銃口が邪魔になって、口がうまく動かない。

「さ……が……ふがふが……は……る」

「ハア？ 聞こえないじゃん！ わたしはね、グズが嫌いななのよ？ もう一度っ」

「……さ……ふがふが……は……る」

「わかったわ。『&……（中略）……る』ね。あんたの名前は、サルよ！」

「ちがう、ふがふがっ、これを抜いてくれっ！」

「うるさいわね！」

どがっ！ と蹴り飛ばされた。

「あんたっつてば、見たこともない妙ちくりんな服着てるし、さつきは何もせずウワツて槍を振ってるだけで今川の兵士をなぎ倒すし、これはどう考えてもまともな人間じゃないわよね。従って、あんたはサル！」

ひでえ、滅茶苦茶だ、と良晴は抗議しなくなった。

「ふざけんな、俺は人間だっ！ いや、むしろ未来の世界から来たんだから神に近いかもっ？ 命を救ってやったんだぞ、少しは俺をありがたがれっ」

「ひとつ。わたしはあんたみたいな妙な存在を自分と同じ人間だとは考えない。ふたつ。わたしは合理主義者で、神も仏も怪異も信じない。したがって、結論！ あんたは人間以下の存在なのよ！」

「詭弁だっ！」

「でもまあ、見た目は人間の雄に似ているわ。キーキー人語らしきものを口走るしね。つまりあんたは獣と人間の中間種、すなわちサルよ！ サルでしかありえないわ！」

ふんふん、と煤で汚れた小鼻を鳴らしながら、信長……いや、信奈が良晴のおでこに人差し指を突きつける。

「でもこのわたしを救いに来るだなんて、見所のあるサルじゃない。ご褒美として、わたしの飼いザルにしてあげてもいいわよ？」

さらに、顔面へと追いつく足蹴りが飛んでくる。

良晴はひらりと身をかわした。

さっきは、あまりの無体に不意を突かれたのだ。

顔面へ足蹴りが飛んでくるとわかってしまえば、どうにかかわすこともできた。

必殺の攻撃をかわされた信奈は、きーっとキレた。

「ちよっとなんで逃げるのよ、黙ってわたしに蹴られなさいよ！ それでも動物なの？」

「うおおおお、なんだこの女っ？ いいかげんに黙れ、俺は人間だー！」

「なっ……生意気なサルね！ 自分の主君を女呼ばわりっ？」

「俺の名前は相良良晴っ！ 誰がお前のペットになんてなるかよっ！」

「べっと？ なにそれ、サル語なの？」

「飼いザルになんぞならねえって言ってるんだ！ いいから、足軽として雇え！」

二人は顔をつきあわせて、ふーふーとお互いうなりを上げた。

姫さまに口ごたえするとは何たる無礼者！ 斬りましょう、と軍馬からおりてきた女の子武将が信奈に耳打ちした。

「六？ 確かに斬るのは簡単だけど、天から降ってきためずらしいサルかもしれないわよ？ なにせ人語をしゃべるんだから。決めたわ、飼うわ！」

「だから俺は飼われないっての！」

「姫さま、この男またしても暴言を！ やはり斬りましょう！」

「いいのよ。無用な戦でずいぶんと小姓を失ったし——それにちょうど、男手が欲しいところだもの」

「……ううむ。それもそうですね。確かに、今の姫さまには男手が必要です」

「それではこのサルを連れて、今すぐ出立よ、六」

「御意。この柴田勝家、引き続き姫さまをお守りいたします！」

なるほど。このおっぱいの大きな女の子が、信長に仕えた猛将・柴田勝家か……確かに

体育会系で剛勇無双むさうって感じだな……と良晴は思った。

六というのは、柴田勝家のあだ名らしい。

しかし男手が必要って、もしかして「織田家の子種こねを宿せ」とか言われて種馬たねうまライフを送らされるんじゃないか……それはそれでアリかも……待て待て、こんな薄汚うすきたないガキが相手なんてイヤだあ！

良晴がそんな微妙なエロ妄想もうちょうにふけていると、いつの間にか首に縄をかけられていた。

信奈はその縄の先をにぎったまま、自分の愛馬まがに跨またがっていた。

「あんたは走ってついてきなさい。サルなんだから、かけっこは得意でしょ」

「ちよっと待て！ うぐううううっ、しまるっ縄がしまるっ！」

「まったく口数の多いサルだ、斬りましょ」

「ダメよ六。わたしの飼かいザルなんだから、勝手に斬きったら怒おこるわよ」

「いいからお前まへら、馬うまで駆かけるなあ！ 首くびがっ、俺おれの首くびがあああああっ！ うおおおー！ やいっ信奈のぶっお前のほうほうが猿さるみたいな格好かっこうしてるくせしやがって、今いまに見みていやがれええええ！」

全力ぜんりきで信奈と柴田勝家の馬うまに併走へいそうしながら良晴は思った。

主人公しゅじんこうがこんな目に遭あう映画えいごが昔むかしあったな……なんだっけ。

ああ……『猿さるの惑星わくせい』だった……。

縄なわにつながれたまま丘おかを駆かけながら「五右衛門助ごえもんすけけるー」と叫さけんでみたが、五右衛門はいっこうに姿すがたを見みせなかった。

「今川軍いまがわぐんが邪魔じゃまをしたせいで、すっかり遅おそれてしまったわね。ほらサル、さっさと池いけの水みづを汲くみ上げなさい」

「はあ？」

息いきもたえだえになつた良晴は、山奥やまおくの池いけの畔ほとりで突つ伏ふしていた。

その良晴のぶのお尻ししに、馬うまから飛び降りてきた信奈のぶがどんと足を下くだろしてきた。

「げほげほげほっ」

柴田勝家は、池いけの周辺まわりに足軽あしかりを配置ちやうそくして、集あつまってきた村人むらびとたちが信奈のぶに近寄ちからないよう警備けいびしているようだ。良晴のぶは信奈のぶに聞いてみた。

「なあ、池いけの水みづを汲くみ上げるってどういうことだ？ のどでもかわいたのか」

「あんたバカじゃん。ほんつとにサルなんじゃないの。わたしはいつでもどこでも水みづが飲のめるように、ちゃんと腰こしにひょうたんをぶら下げてるじゃないの。見みえないの？」

「見みえてるよ！ バカなのはお前のそのファッションセンスだっ！」

「またサル語さるごを使つかってごまかす。ほら、ひょうたんを持もってなさい。腰こしにぶら下くだげて歩あくと、けっこう重いおもいのよ」

「おうっ」

ほんぼんぼん、と矢継ぎ早に顔面めがけて水の入ったひょうたんをぶつけられた。

「それ、一個でもなくしたら首をはねるわよ」

この女いつか見てろ、がるるる、と良晴は牙をむきだしてほえた。

「ほらほら、とつと水を汲むの！」

「汲み上げたら、俺をベツトではなく足軽として雇うと約束しろよ！」

「はいはい。汲み上げられたら、ね」

男手が必要って、この労働作業のためだったのか……と良晴はうなだれながら立ち上がった。

まあ、猿みたいな小汚い格好の信奈に「種馬になれ」と言われるよりはマシだ。

ひしゃくで池の水を汲みながら、良晴は尋ねてみた。

「で、どれくらい汲めばいいんだ？」

「全部よ。池の底が見えるまで」

「ちよっと待て——！ 無理だろっ！ バケツ何杯分あるんだよっ？」

「はあ？ ばけつって何？ いいから、とつとやりなさいよ」

「意味わかんねえ！ 人間の精神はなあ、無意味な単純作業を続けさせられると壊れるんだぞ！」

「ふうん。あなた、ほんとにこのへんの者じゃないのね」

信奈は椅子に腰掛けてひょうたんに唇をつけながら、ぶつさらぼうに説明した。

実に面倒臭そうだった。

「この『おじやが池』にはね、龍神が棲み着いてるって噂があるのよ。それで、これまで村人たちが池に人柱として乙女を沈めたりしてきたわけ」

「マジかよ。迷信深い村だなあ」

「まったく、神だの仏だのなんているわけないのね。そんなもの、人間の頭の中に棲み着いているだけの気の迷い、要は幻じゃん」

「さすがに合理主義者だな」

やっぱりこの世界ではこいつが織田信長なんだなあ、と良晴は思った。

だが、中世日本を革命した天才児には見えない。見えなかった。

どう見ても、小汚くて痩せた不良の小ザル娘といったところ。

「まったく、世の中バカばかりでイヤになっちゃう。ほら、六の隣に線の細い美少女が立ってるでしょ？ あれが今年の生け贄、人柱なわけ」

信奈が指さす先に、確かに青白い顔をして震えている和服の少女が一人。

遠目にも、なかなかの美少女だということがわかった。

長い髪の毛がなぜかつやつと青くて、いかにも薄幸のヒロインといった風情だ。

「あ……あの子を池に沈めるだつて？ モツタイナイ!!」

「そうよ。だからわたしが、この村の愚民どもに教えてやるのよ。池の底に龍神なんて棲んでいないってね。でも、そのためには池の水を全部汲み出す必要があるでしょ？ 今川の連中が邪魔さえしなければ、大勢の男手を使つて汲み上げられたんだけど」

良晴の瞳が、きらきらと宝石のように輝き始める。

藤吉郎のおっさん！

さつそく来たぜ、俺たちの野望をかなえるチャンスがよ！

見ていてくれよ！

「よーし、わかった！ 汲み出してやらあ！ そのかわり、あの子を俺に紹介してくれつー！」

「……はあ？」

「龍神の生け贄なんてモツタイナイ！ 龍神なんて迷信だという真実を村人たちに知らしめて、そしてあの子には俺の彼女になつてもらうんだ！ いいな、約束だぞ！」

「ちよ、待ちなさいよ？」

根性だ！

根性だ！

根性だあああ——！！

……

いったい何時間かかったであろう。

退屈した五右衛門が土遁の術と水遁の術を駆使してこつそり池の水の一部を川に流すという作業をやってくれたとはいへ、池の水の半ばは良晴が己の腕一本でかき出していた。

その美少女への飽くなき執念、藤吉郎が我が弟分と見込んだだけの男ではあった。

夜がとっぷり暮れた頃、ついにおじやが池の水は一滴のこらず消滅していた——。

「すつごいわね、あんた……この根性、ただもののサルじゃないわ……」

信奈も思わず感心するほどの働きっぷりであった。

そして信奈は、働きの者が好きなのである。

池の水を汲み上げたことで、龍神伝説の正体も明らかになった。

露出した池の底には、龍神などは存在しなかった。

かわりに、大きな鯉が一匹ぴちぴちと跳ねていた。

その光景を目撃した村人たちが、どよめきはじめる。

「ほらほら、みんな見たかしら？ この鯉が、あんたたちが拜んでいた龍神の正体よ！ 村人たちは、口々に「おどろいたみゃあ」「信奈さまの言うとおりであったみゃあ」とつ

ぶやきながらそれぞれの家へと帰っていった。

そして、この試験を執念と気合いだけで見事に達成した良晴は——
 「よくがんばったわね、サル。あなたに命を救われた娘が、直接あなたにお礼を言いたい
 そうよ。はい。連れてきたわ」

「ほんとうにありがとうございます、相良良晴さま」
 過労死寸前にまで衰弱すいじやくしていたにもかかわらず、狂喜乱舞きやうきらんぶしていた。

うおおおお、俺のカンは適中しじゆうしていた！ 目元めもとばっちりの美人だあああ！ しかも、あの信奈が俺との約束を守ってくれたなんて!? これは運命の出会いだよそうに違いない！
 学校では「神聖モテナイ少年同盟」の一員だった俺だが、意外にも実は俺って戦国時代では女の子に縁ゆかりがあるらしい！

そうだよ。がんばればがんばっただけ報はぐわれるんだ、この戦国の世界では！ 顔とか学力とか部活とか財力とかそういう男子としてのスペックなんて関係ねえ！ 俄然がぜん、やる気が出てきたぞおおお！

「私は今宵よよ、婚約こんやくしているお方と祝言しゅうげんをあげます。ほんとうにこのご恩は一生忘れません、相良良晴さま。ほんとうに、ほんとうに親切なお方」

「えっ!? 祝言しゅうげんッ!? 婚約者こんやくしやッ!?」

「はい。人柱ひとしらべに選ばれたことは本望ほんぼうでしたが、幼なじみの許婚いひごけを残のこしていくことだけが気がかりで悲しかったのです……まさか現世で結ばれるだなんて。すべて、織田の姫さまと

あなたのおかげです。私、幸せです！ 今すぐにあのお方と祝言をあげます！」

「えええええっ!?」

「あなたがたに与あたえていただいた、ただ一度きりの人生です。後悔こうかいのないように日々を生きたらせていただきます！ それでは、失礼いたします！」

「あ。いや。うん。ヨ、ヨカッタジャナイデスカ。ガンバツテネ」

「ほんとうによかったわねサル！ わたし、こんなふうの人に感謝される経験けいけんってあまりなかったのだけれど、良いことをした後あとって気分が良いわね。ああ、そういえば彼女に許婚いひごけがいることを教えるのを忘れていたかしら。ふふふっ」

放心しんじんして崩れ落ちたとたん、ぶぎゅる、と信奈に後頭部ごこうぶを踏みつけられた。

「ちよっとなに倒たおれてるのよ。ご褒美ほうびにあんたを足軽あしがるにしてあげるわ。サルを足軽に取り立てるだなんて異例いれいのことよ、感謝こうかしなさいよ？ ねえちよっと聞きいてるの、このサル？」
 だが、海よりも深く落胆らくたんした良晴にはもう反撃はんげきする元気も残のこっていない。

大地ちがひにひれ伏ひたすして号泣ごうきしながら（ナイーブな俺のハートを弄もよほびやがって、信奈め！ いか必ずかならずこの借りかかりは返してやる、きつと大手柄おおてを立てて天下一てんか一の美少女を恩賞おんしょうとして要求してやる！）と誓ちかったのだった。